

2021年度第4四半期 決算報告

説明要旨

2022年4月27日

【説明会資料】

<https://www.zeon.co.jp/ir/financial/bs/pdf/220427.pdf>

【説明内容】 (常務執行役員 曾根 芳之)

p.2 2021年度Q4(第4四半期)総括とセグメントの概況

Q4 連結実績は前年同期および前期と比較して増収減益。新型コロナウイルスの感染拡大により、調達に軽微な影響はあるも、生産への影響はない状況。

エラストマー素材の概況は、主原料価格高騰に伴う販売価格改定が進み、売上高はYoY・QoQともに増加するも、海上運賃や修繕関連費用等の増加により営業利益は減少した。コンテナ不足や船繰り難で、欧米向け中心に出荷の遅れが出ている。

高機能材料の概況は、売上高はYoY・QoQともに増加、営業利益はYoYで増加するもQoQでは海上運賃と新規開発費用等の増加により減少。高機能材料の需要は総じて引き続き堅調。

p.3 2021年度Q4の事業環境(為替・主原料推移)

為替は、前年同期比でUSドル、ユーロともに円安、前期比ではUSドルが円安、ユーロがやや円高に推移した。

国産ナフサ価格は昨年来、上昇を続けており、前年同期比で1.7倍となった。アジアブタジエンはQ3に急落したものの、Q4に大きく反転し、前年同期比で14%の上昇となった。

p.5 2021年度Q4業績サマリー(全体)

売上高930億円、営業利益80億円、経常利益103億円、当期純利益60億円。

売上高は四半期で過去最高。

前年同期比では、売上高は73億円増収、営業利益は43億円減益、前期比では、売上高は33億円増収、営業利益は34億円減益。

対前年通期比では、売上高は598億円増収、営業利益は110億円増益となり、2021年度通期業績は売上高から当期利益に至るまで全て過去最高となった。

p.6 2021年度Q4業績サマリー(セグメント別)

時間の関係上、前期比のみご説明させていただく。

売上高は、エラストマー素材526億円、高機能材料265億円、合計で33億円の増収。

営業利益は、エラストマー素材27億円、高機能材料60億円と、両セグメントとも前期と比べて減少し、34億円減益となった。増収減益の理由については、この後ご説明する。

p.7 2021年度通期業績サマリー(セグメント別)

こちらはセグメント別の通期の業績である。

対前年比ではエラストマー素材、高機能材料ともに増収増益となった。業績予想に対しては、売上高13億円、営業利益11億円の下方着地となった。

サブセグメント別の差異要因については、添付の補足資料をご確認いただきたい。

p. 9 エラストマー素材 概況

左のグラフは、国産ナフサ価格とエラストマー素材の売上高推移を示している。国産ナフサ価格上昇に伴い、エラストマー素材の販売価格改定が進み増収となった。

右のグラフは合成ゴムの20年度Q4の出荷量を100とした場合の出荷量推移を指数で表している。

21年度Q4の需要は堅調だったが、欧米向けコンテナがタイトで出荷が遅れた影響もあり、前年同期比で出荷減となった。前期比では、お客様の稼働向上に伴い、汎用ゴムを中心に出荷優先対応を行ったことで、7%の出荷増となった。

p. 10 エラストマー素材 P/L

出荷量は20年度Q4の出荷量を100とした指数でお示ししている。

エラストマー全体ではコンテナ不足等の影響を受け、前期比でほぼ横ばい、前年同期比で12%減少した。売上高は526億円、合成ゴム・化成品価格改定により、前期比で36億円増加した。

営業利益は27億円、ラテックス価格鎮静化、海上運賃上昇と修繕・間接部門費用配賦増の影響を受け、前期比で24億円減少した。営業利益の差異分析については、次のページでご説明する。

p. 11 エラストマー素材 営業利益差異 (QoQ)

こちらは、エラストマー素材の営業利益を前期と比較したものである。

販売価格改定と為替円安の影響で、20億円良化したが、約6億円の棚卸資産関連費用と約13億円の原料価格悪化に加え、海上運賃上昇、間接部門費用配賦等で、18億円の悪化を受け、営業利益はQoQで24億円の減少となった。

p. 12 エラストマー素材事業 営業利益差異 (YoY 累計)

こちらは、営業利益を前年同期と比較したものである。

合成ゴムの出荷増、販売価格改定、為替による良化分を合わせて、434億円良化した。他方で、原料価格および海上運賃上昇、修繕費増、間接部門費用配賦により371億円悪化し、前年同期比で63億円の増加となった。

p. 14 高機能材料 P/L

高機能樹脂は、中小型向け光学フィルム需要の端境期と光学樹脂の出荷品目構成差の影響を受け、前年同期、前期比ともに売上高は減少した。

高機能ケミカルは、電池材料の出荷増、化学品販売価格改定により増収となった。営業利益は新規開発費用等の増加により、対前期比で4億円減少となったが、対前年同期比では3億円の増益となった。

p. 15 高機能材料 営業利益差異 (QoQ)

こちらは高機能材料事業の営業利益を前期と比較したものである。

化学品の販売価格改定と電池材料の品目構成良化により価格差は5億円良化、生産増に伴う製造固定費減と生産改善による原価低減で3億円良化した。しかし、海上運賃上昇と新規開発費用増の発生により、販管費は15億円悪化し、前期と比較し営業利益は4億円減少した。

p. 16 高機能材料 営業利益差異 (YoY 累計)

こちらは、高機能材料の営業利益を前年同期と比較したものである。それぞれ記載の事業で、出荷増、価格改定、為替差により51億円良化した。さらに、生産増に伴う製造固定費減及び原価低減等により8億円

良化したが、海上運賃上昇、新規開発費用増等で 15 億円悪化し、営業利益は前年同期比で 44 億円の増加となった。

この後、高機能材料の主要事業の出荷状況についてご報告する。

p. 17 高機能ケミカル事業：電池材料の状況（出荷量）

こちらは、電池材料の Q4 出荷量を対前年同期、対前期で比較したものである。

EV 向けは、対前年同期比 172%、対前期比 117%と堅調。民生用は、家電・モバイル端末向けの需要一服感が継続し、対前年同期比 80%となるも、産業用途を中心に QoQ は出荷増となった。

p. 18 高機能樹脂事業：光学樹脂の状況（出荷量）

光学用途向けの需要は、半導体不足によりプリンター向けの需要が鈍化したが、セキュリティカメラ向けの需要が堅調に推移し、出荷増となった。

医療、その他向けは、プレフィルドシリンジ等の医療包装容器向けの需要が堅調に推移しており、さらに、当社の生産、物流の要因により Q3 に出荷減となった分をまとめ出荷したことにより、Q4 に大幅な出荷増となった。

p. 19 高機能樹脂事業：光学フィルムの状況（出荷量）

中小型向けは Q4 に需要端境期に入り、また、半導体不足によるタブレット減産の影響を受け出荷量減となった。

大型向けは、液晶パネル価格下落へのご心配の声をいただくが、当社フィルムへの影響は軽微であり、需要は堅調。

p. 21 B/S 概要

貸借対照表の概要である。

総資産は 358 億円増加し 4,847 億円となり、純資産は 236 億円増加した。

p. 22 C/F 概要

営業キャッシュフローは、原料価格高騰による在庫価格の増加により前年同期と比較し 230 億円減少し、331 億円となった。その結果、フリーキャッシュフロー67 億円、トータルキャッシュフローは▲52 億円となった。

p. 24 2022 年度事業環境 エラストマー素材

エラストマー素材の 2022 年度事業環境は 2021 年度比で増収減益を見込んでいる。主原料価格前提が高騰しているため、原料費の悪化を想定しているが、これに伴う販売価格改定は織り込み済み。しかし、事業規模の大きい合成ゴムの主力工場が 2022 年度に定期修繕を迎えるため、固定費悪化を想定。併せて、手袋用ラテックスの価格鎮静化の影響を織り込んでいる。

p. 25 2022 年度事業環境 高機能材料

高機能材料の 2022 年度事業環境は、2021 年度比で増収増益の見込み。いずれの事業も需要は堅調だが、光学フィルムは新ライン立ち上げ準備として、2022 年度中に人材採用等の能力増強準備費用を見込んでいる。

p. 23 2022 年度業績予想

以上の環境を元に、2022 年度業績は過去最高となる売上高 4,000 億円、営業利益 455 億円と予想してい

る。各種の前提条件は、本資料のコメント欄をご参照いただきたい。

p. 27 **2022 年度配当金予想**

配当金については、中間期末 18 円、期末 18 円の予想とさせていただき、年間では前年同期比 8 円増配の 36 円と予想している。

以上